

基礎演習のための文章論ノート

三浦 元博*

要 約

日本語を話すことと書くことは別である。話し言葉は自然に習得されるが、文章技術の会得は訓練を必要とする。大妻女子大1年生を対象にした基礎演習での体験から言えば、改行や読点の打ち方など基本作法からセンテンスの構造に至るまで、話し言葉に引きずられた表現が目につく。文字によって何かを表現する経験が浅いためだと考えられる。小中高の教育課程において「書く」ことが重視されてこなかった結果であろう。しかし、さまざまな時事問題などについて考えを文章にまとめ、添削とリライトを複数回丹念に繰り返すことによって、比較的短期間に一定程度の筆力向上が期待できる。基礎演習のノートから再録する。

はじめに

日本の若者の言語力が低下しているという。経済協力開発機構（OECD）が実施している「生徒の学習到達度調査」（PISA）の結果、日本は総合読解力の世界ランクで2000年の8位から03年の14位にまで順位を落とした。これに衝撃を受けた文部科学省は学習指導要領を改訂。新指導要領は思考力・判断力・表現力の涵養と、その基礎として言語活動の強化をうたっている。学習指導要領の改訂は本稿のテーマではないが、改訂教育基本法が影を落とした新指導要領は、論理的思考力の育成という目標とどこかで本質的な矛盾をはらんでいるようにも見える。実効性はどうかであろう。

日本語ほど話し言葉と書き言葉に隔たりがある言語も珍しい。これを日本語の特性（欠陥）として認識することから始めるべきではないのか。英

語など印欧語系の言語であれば日常会話でも主語の直後に述語が置かれ、これで文の骨格は完成する。文の重要な成分から順に現れる“逆ピラミッド”、形の構文におのずからなる。意味は明快である。

これに対し日本語は、述語が常に文末に来るという構造のため、センテンスが長くなるほど文意が不鮮明になりがちだ。さらに、書き言葉が会話語とは大きく異なるという特性がこれに加わる。読み書き経験の浅い学生が文章作成に戸惑う理由の一つがここにある。日本語は、話せてもなかなか書けない。

本稿では大妻女子大新入生を対象とした社会情報学基礎演習（主として2008年前期）での経験を基に、学生たちの文章能力の向上を図るための要諦について考えてみたい。わずか4カ月間、22人の受講者という限られた条件下での実験と考察だ

*大妻女子大学 社会情報学部

が、問題のありかとか対策の方向はうかがい知ることができよう。

1. 作文演習から

基礎演習の目標を文章表現力の向上に絞ったのは、「情報」の基礎が言語にあること、そのため言語能力の獲得、特に読解力と情報伝達力の鍛錬が今後の学習・研究の前提条件になるからである。われわれは日常、目覚めている間は言葉のシャワーを浴びている。テレビ・ラジオの音声と映像、新聞・雑誌・書籍などの文字。学生たちが朝一番に接する言葉は、携帯メールの文字か、友人からの電話だろうか。言葉は情報伝達の基本単位である。

ところが言葉ほどやっかいなものもない。日常は意思伝達に不自由しなくても、思わない時に誤解が生じ、あわてることがある。死刑執行命令書に気安く署名する法務大臣を、朝日新聞のコラムが「死神」と呼んだ。物議をかもしたのは当然である。ある言葉にどのような意味内容（メッセージ）を込めるか、これはなかなか難しい。法相はあくまで法に従った手続きを踏んでいるにすぎない。執行命令書を機械的に決済するかのような行為は、道徳性に疑問符が付くにせよ、不法ではないのである。死刑制度廃止の主張に正当性があるとしても、時評コラムにふさわしい表現ではなかった。

新聞社を代表する文章のプロにしてこうである。経験の浅い学生たちが入学1年目の時点で、まともに文章を書けなくても驚くには当たらない。書けなくて当たり前なのだ。

演習ではまず受講生らの文章能力を見るため、「私の長所」の題で800字の作文を課した。ゼミ室での作業なので原稿用紙に手書き（縦書き）である。若者世代の間では「ワープロ・横書き」が主流になっているようだが、日本語は縦書きが基本。縦書きの方が基本作法も理解させやすい（コンマ、ピリオドで句読点を代用する横書き文は論外である¹⁾）。

提出された作文を通覧すると、いくつか共通の

特徴が浮かび上がる。個条書きにすると、次のとおりだ。

- ①段落分け・改行・1字下げといった作法を身につけていない。
- ②執筆に制限時間は設けなかったが、350～500字程度で終わってしまった作文が多い。
- ③文体は敬体（「です・ます」調）が主流（これは講義科目における3・4年生のレポートにも散見される）。
- ④自分自身を「人」と呼ぶなど俗語的表現の頻出。
（例）「今の私はざっとこのような人です」
「（私は）すぐ上機嫌になれる人です」
- ⑤無駄な前置きが多い。
（例）「自分自身の長所を考えるのは、とても難しいのですが、自分のことを考えることはあまりない機会なので色々書いてみることにします」
「私の長所の1つ目は、あまり積極的ではないのですが、人見知りはしないことです」
- ⑥動詞「思う」の頻出。
- ⑦センテンスが長い。
（例）「まだ小学3年生だった時代に、障害を抱えた人たちの施設に行き、一緒に色々な歌を歌ったり、遊んだりするというボランティアに参加した」
「考えてみると自分はネガティブで積極的に取り組むのが苦手であり長所がみつからないけれどもっとポジティブになって何事も前向きに考えられるようになりたいと思います」（「で」の重複、読点の欠落）
- ⑧同じ語句の繰り返し。
（例）「今はまだ笑い話にできるほど日にちがたっていないが、いつか友人たちと笑い話にできるようになりたいと思う」
- ⑨無駄な接続語の使用。
- ⑩内容の説明不足。

以上に取り出した特徴を帯びた文の成り立ちを考えると、一つの共通点が見て取れる。いずれも

話し言葉の文体を引きずっていることだ。いわゆる敬体と呼ばれる「です・ます」調。無駄な前置きや動詞「思う」の多用、長くなりがちなセンテンス、説明の不足—これらは日常会話の日本語をそのまま文章語に引き写したときに見られる現象だと考えられる。

これは演習の期間中に実施した新聞購読・読書習慣などに関するアンケートの結果とも符合しているようだ。アンケート結果によれば、回答者21人のうち新聞を毎日読んでいるのは3人。まったく読まないグループが9人、これに「時たま読む」と答えた学生9人を加えると、18人(86%)が事実上、新聞を読んでいないことになる。読書について見ると、月1冊のグループが6人、月2～3冊のグループが3人。ほとんど読まないとする回答は、半数を超える12人(57%)に上った。活字との接触の希薄さが浮かび上がる²⁾。

2. 話し言葉・書き言葉

学生らにまず理解させなければならないのは、日本語における話し言葉と書き言葉の根本的な違いである。構造的な差異を理解すれば、作文実践の効果も上がると思われる。

敬体「です」「ます」は筆者と読者の関係を固定化してしまうため、日常会話ないし私信には適しているが、物事の客観的叙述には向かない³⁾。事務連絡のようなビジネス上の会話や政治演説、各種行事などでのスピーチ（これらは発話されてはいても、実は文体は書き言葉に近い）は別として、日常の会話では、人は自分の意思を無意識のうちにさまざまなオブラートに包んで表現する。客観的事実の伝達には向かない動詞「思う」を日常会話では多用しているし、「～かどうか分かりませんが、…」といった譲歩の口上を付け加えるのが常である。相手との不用意な摩擦を避けるため、物事のストレートな断定、断言を回避しようとする意識がはたらいているのであろう。

たしかに相手と対面する会話では、婉曲な表現は人間関係を円滑にする効用がある。極めて事務的に語れば、相手に「ぶっきらぼう」「突っ慳

貪」の印象を与えてしまう。最近でこそ見られなくなったが、かつて市役所などでは窓口の小役人がいばっていたものだ。市民からの相談に対し、相手を小馬鹿にしたような事務的な応対しかできない人がいた。ドイツなどでは今も *Sachlich*（ザッハリッヒ）な物言いをする事務員がいて、面食らうことがあるが、これは言語文化の違いだろう。日本語会話は婉曲話法が心地よい。だから、この常道を外れて率直に物を言うことを、「歯に衣着せずに」とわざわざ断るのだ。

語順に関しても文章語には一定の制約があるようだ。「私はとっても、どんな悩みごとでも聞いてくれる母が好きです」。音としては耳にはすっと入ってくる文でも、文字化されると読みにくくなる。文字が伝える情報回路は単線的であるからだ。書き言葉では、係る単語は近くに置くのが基本である。

語順の問題を考える場合、日本語統語法の特徴を見ると理解しやすい。例えば次の英文の和訳を考えてみる。

I like my sister because she buys me anything I want.

教科書風に逐語訳をすると、次のようになる。

「私は、欲しいものは何でも買ってくれるから、姉が好きだ。」

主語（私は）と述語（好きだ）がどうしても離れてしまう。文法的な誤りはないにせよ、読みづらい日本語になる。英文に形容詞句や副詞句が付け加わるなどしてもっと長くなると、和訳文は一段と煩瑣になっていく。逐語訳の目立つ翻訳書が読みにくいのはこのためである。

ところが、英文の語順をそのまま生かして和訳してみると、次のような訳文が可能だ。

「私は姉が好きだ。欲しいものは何でも買ってくれるから。」

主語と述語が接近しているため、簡潔な文になる。英語は原則として主語の直後に述語が置かれるため、意味は明瞭である。センテンスが長くなったとしても、文の核心部分は変わらない。この点、日本語は注意していないと、いつのまにか文意が曖昧になってしまう。

文章語と話し言葉の間に横たわる深い溝は、日常会話における意思伝達が常に双方向であるという決定的な特徴も関係している。一対一あるいは複数人を相手とする会話の場合、情報の伝達は「質問と答え」の繰り返しによって行われる。説明が不十分であっても、相手は必要な質問を繰り返し投げかけることによって詳細なメッセージを読み取ってくれる。次のような例文を見ると納得できるだろう。

(会話例)

A子「春休みに北海道行って来たの」
B子「どこ、どこ？」
A子「釧路の友達の実家に泊まって、それから摩周湖まで行って、それで、夜はカニ食べて」
B子「どうやって行ったの？」
A子「釧路まで飛行機」
B子「ううん、摩周湖のことよ」
A子「あ、それね。レンタカー借りたの。わたし免許持ってんのよ、知らなかった？」
B子「一人で運転して行ったの？すごい」
A子「ううん、友達と二人だよ。摩周湖、チョーきれいだった」
B子「いいな～。カニどうだった？」
A子「ハナサキガニって食べたの初めて。赤くて、肉が厚くて、ジューシー！」

...

...

こうしてジグザグを繰り返しながら会話は続く。春休み旅行に関する情報を発信しているA子は、必要な要素を一度では伝え切っていない。会話の日本語はもともと“舌足らず”なのだ。問い返しという行為と音声の抑揚、身体ジェスチャーがこの不足を補っている。これが会話のリズムと

いうものだ。

文章上では気になる同じ語句の繰り返しも、瞬時に消えてゆく音声の世界ではまったく問題にならない。むしろテレビ通販の口上のように、同じ句を連呼することで相手に強い印象を与える効果さえある。また、会話文は明確な切れ目がなく、長くなりがちだが、これも音声の世界では苦にならない。「それから」「それで」など、それ自体は無意味な接続語も、会話では立派につなぎの役割を果たしている。特に話し言葉は変成を繰り返しているから、「チョー（超）きれい」「ぶっちゃけ、あの人は嫌い」などの表現も、会話では許容される。

これに対し、文章によるメッセージの伝達は一方向かつ単線的である。こちら側の意図は一度で正確に伝えなければならない。試しに、A子が伝えた情報を文章にしてみよう。

(例文)

春休みに北海道を旅した。空路釧路まで飛び、友人の実家を尋ねた。

夜、友人のご両親からカニ料理をご馳走になった。ハナサキガニを口にしたのは初めてだ。茹で上げると鮮やかな赤い甲羅。ボリューム感のある引き締まった身をほおぼると、口中にうまみのある汁が広がる。文句なしにうまい。

翌日は友人とレンタカーを借り、摩周湖までドライブ。北海道の原野を走るほぼ直線の道路は信号がない。発進とブレーキを小刻みに繰り返す都内の運転と違って、免許取りたての私でも不安はない。約3時間で目的地に到着。展望台からがけ下をのぞくと、すり鉢形の底に水をたたえた湖は、深い群青色の水面を見せていた。

書き方はいろいろある。カニよりも摩周湖を強調したいなら、いきなり2日目の話から入ってあげればよい。ただ、会話でB子が発した質問は、作文であれば読者が興味を持つ要素である。書き順はどうであれ、伝えるべきファクトを詳しく書き込まなければ、読む側としては隔靴搔痒の感が残ってしまう。

文章は具体的に、詳しく書かなければいけないことが、これで分かる。くどすぎるほど詳しく書けば、結果として、紙幅は足りなくなる。そこで、限られたスペースに詳しく書くためには、無駄な前置きや譲歩の文句は極力省くことが必要になる。センテンスは簡潔でなければならない。適切な単語を使いこなすには、常に国語辞典を座右に置いておかなければいけない。できれば、初めて出合った単語・表現はノートに書き留めておくとよい。

要するに、「大学生らしい」文章を書くためには、先に挙げた共通の欠点の逆を考えればよいことになる。⑦に挙げた例文で言えば、次のように短文に切り分けることができる。

(書き換え例)「まだ小学3年生だった。障害を…」と2分割する。または「小学3年生の時だった。障害を抱えた人たちの施設へ行った。一緒に色んな歌を歌ったり、遊んだりするボランティアに参加した。」と3分割すれば、さらに読みやすくなる。

(書き換え例)「考えてみると、自分はネガティブで積極的に取り組むのが苦手だ。あまり長所が…」。

文章作法ではこのほか、読点の打ち方についても指導が必要であった。読点の使用には明確な原則はなく、執筆者の審美観によるところが大きいといえる。筆者自身、迷うことがしばしばある。全く読点のない文は読みづらいし、誤読される原因にもなる。逆に、多すぎても文の流れが悪くなるし、視覚的にもわずらわしい。音読したときの「息継ぎ」点に相当するといわれるが、アナウンサーの息継ぎに従うと、読点が多くなりすぎる傾向がある。文の長さにもよるが、強引に数値化して言えば1センテンスに2、3カ所がいいところであろう。

3. 言葉は魔術

演習では簡潔な文章の模範例として、古今の作

家の手になる代表的な文章を取り上げた。短文の軽快なリズムを味わわせる目的である。いずれの例文も学生たちは高校までの国語教科書で一度は出合っているに違いないが、3点を並べることによって文体論としての意味が理解されよう。

春は、曙。やうやう白くなりゆく、山際すこし明りて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は、夜。月のころは、さらなり、闇もなほ、螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りてゆくも、をかし。雨など降るも、をかし。

(『枕草子』、角川書店・日本古典文学第8巻)

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生まれたか頓と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャー〜泣いて居た事丈は記憶している(注：横書き文にくり返し符合はなじまないが、原文を損なわないために残した)。

(『吾輩は猫である』、岩波書店・漱石全集第1巻)

國境の長いとんねるを抜けると雪國であった。夜の底が白くなった。信號所に汽車が止まった。

向側の座席から娘がたつて来て、島村の前のガラス窓を落とした。雪の冷気が流れこんだ。

(『雪国』、新潮社・川端康成全集・第24巻)

言葉は生き物である。昔の人は言霊と呼んで、言葉に霊力があると考えていた。小林秀雄の表現を借りるなら、言葉は「様々なる意匠」という魔術を行う。うまく操れば生きる。料理にも似ている。新鮮な食材を活かすも殺すもシェフの腕しだいである。学生たちが言葉の面白さに気付けば、文章に対する興味がわくに違いない。

以下に演習で取り上げた学生の作文例と書き換え例を挙げる。書き換え例では、「です・ます」調を改めたほか、センテンスを短くし、漢字を適宜使用。命題を文頭で簡潔に述べるという原則に従い、全体の構成を変えてあるが、原文中の要素はほぼそのまま残した。

◎「私の長所」(原文、読点ママ)

「自分の長所を書きなさい」と言われても私は、自分が人より長けている部分が、見当たりません。なので、自分の中で、自分の気に入っているところを書こうと思います。

まず一つめは、どんなにイヤなことがあっても、寝るか、おいしい物を食べるか、すれば一瞬で忘れることができます。たとえば、学校の先生とかにキツクおこられても、おかしなどを食べれば、おこられた時のモヤモヤなんて、すぐに消えます。でも、そんな私のケロツとした様子を見て、先生は、反省していないと、思いました、おこります。でも、私はまた、数分後には、ヘラヘラしているので、イタチゴっこになってしまいます。

この性格のおかげで、私は、生まれて十八年間、ほぼ、ストレスとは無縁です。

長所と呼ぶにはふさわしくないかもしれませんが、一応気に入っています。

2つめはマイペースな所です。

私は、中学も高校も、女子校なんですけど、集団でトイレなどに行くのが、大キライでした。なぜ、みんなでトイレに行かなきゃいけないのか？と、常に疑問でした。私の高校は私のような考えの子が多かったのですが、大妻のトイレは、集団がいっぱいいて、びっくりしました。私は、けっこう一人でいるのが好きなんで、あんまり人に頼りません。そのおかげで時間の管理が厳しくなりました。

めったにチコクしなくなったし、自立するようになりました。

この2つが私の長所です。(了)

↓↓

◎「ストレス知らず」(書き換え例)

生れて18年間、ストレスとはほぼ無縁である。

どんなに嫌なことがあっても、寝るか、おいしい物を食べたりすれば、一瞬で忘れるという特技が私にはある。学校の教師などにひどく怒られても、菓子でも食べれば、怒られた時のモヤモヤな

んですぐに消える。そんな私のケロツとした様子を見て、反省していないと思い、教師はまた怒る。だが、数分後には、私はまたヘラヘラしている。イタチゴっこである。

こんな性格のおかげで、ストレス知らずなのだ。長所と呼ぶにはふさわしくないかもしれないが、一応気に入っている。

長所の二つめは、マイペースな態度。

私は中学も高校も女子校に通った。集団でトイレに行くのが大嫌いだった。なぜ、みんなでトイレに行かなきゃいけないのかと、常に疑問だった。私の高校には同じような考えの生徒が多かった。ところが大妻のトイレでは、学生の集団がいっぱいいるのに驚いた。

私は案外、一人でいるのが好きなのだ。あまり人に頼ることがない。おかげで、自分の時間管理には厳しくなった。めったに遅刻しなくなった。自立するようになったのだ。

以上の二つが私の長所といえよう。(了)

4. 新聞言語

演習では死刑制度問題、代理出産問題などで小論文を作成するため、新聞記事も適宜使用した。だが、近年の民放キャスターらが口にする怪しげな日本語は言うまでもなく、新聞にも無神経な文章が頻出するようになっている。適当な教材を求めて新聞を丹念に読んでみると、奇妙な日本語にしばしば遭遇する。マスコミ現場で働く人々の言語体験の貧困化を物語っているのかもしれない。センテンスの冗漫化などは編集作業のデジタル化とも関係があると思われる。悪文は反面教師としての生きた教材にはなるのだが、要注意である。

紙面上(ここでは『朝日新聞』)で見かけた問題表現のいくつかを紹介する。

①「波紋を呼ぶ」

5月9日付朝刊商況面に掲載されたコラム「経済气象台」に、こんな一節があった。

「原油価格高騰の裏で、食料価格も大幅な上昇を見せ、各国で大きな波紋を呼んでいる。」

「波紋」とは、池に石を投げたとき水面にできる同心円状の波形のことだ。「波紋を呼ぶ」とはどんな様子を指すのであろう。「波紋」は、「閣僚の暴言が波紋を広げている」「閣僚の暴言に波紋が広がっている」と使用するのが妥当であろう。この記事なら「…各国で大きな波紋が広がっている」としなければいけないところだ。さすがに、この表現のおかしさに気付いた学生はいなかった。

ちなみに4月1日～7月30日の間の朝日新聞記事データベースで検索したところ、「波紋を呼ぶ」式の言い回しが25件あった。これに対し、正しい「波紋」用法は98件。誤用率は約20%である。また、4カ月間に120件余りの「波紋」が出現する事実は、常套的表現があふれる新聞言語の陳腐さを示している。読売新聞について、同条件で同様の検索をしてみると、こちらは「呼ぶ」が14件、「広がる（広げる）」が44件で、同じように誤用されていることが分かる。

同様の不注意な表現はほかにもある。後期基礎演習で使用した記事例を挙げる。

「…米大統領選で敗れた共和党のマケイン陣営から、副大統領候補ペイリン・アラスカ州知事の資質に疑問符を投げかけ、敗北のツケを負わせる内輪もめの情報が、米メディアに次々に登場している。」

(11月8日付夕刊)

「疑問符」は投げかけたりしない。「疑問」を投げかけるのであって、疑問符は「付ける」「付く」という動詞との組み合わせがなじむ。この間違いに気づいたゼミ生は一人だけいた。

② 「けがを負う」

2例目は、秋葉原連続無差別殺傷事件に続いて、八王子市でまたも起きた悲惨な通り魔殺人事件を伝える記事である。事件の衝撃度から言って、多くの読者の目に触れたはずだ。

(例2) 22日午後9時40分ごろ、東京都八王子市明神町3丁目の京王八王子ショッピングセンター9階の書店で、女性2人が刺されたとして119番通報があった。女性はいずれも20代とみられ、警視庁によると、1人は間もなく死亡した。もう1人もけがを負った。」

(7月23日付朝刊1面=13版)

「けがを負った」の表現はどこか違和感が残る。「けが」とは「思いがけず傷つくこと。負傷」(『広辞苑』第六版)である。「けが」の中に「負う」の意味は既に含まれている。どことなく不自然な感じがするのは、このためだろう。ここは「けがをした。」とするのが自然だ。

『朝日新聞』の記事データベースで調べてみると、7月の1カ月間で「けがを負った」の表現は36件。「けがをした」が123件登録されている。『毎日新聞』ではこの期間「…負った」の19件に対し、「…した」が69件。『読売新聞』では37件対56件と、使用率が高い。

③ 冗漫

次は、日本語として誤りではないが、あまりにも冗漫な文例。竹島(韓国名・独島)が学習指導要領解説書に「我が国固有の領土」と明記されることについて、韓国側が態度を硬化させているという記事の一節である。

当選直後「(歴史問題で日本に)謝罪や反省という話はしたくない」と述べ、4月の日韓首脳会談でも「未来志向」を打ち出した李大統領が一転して厳しい姿勢を示し、日本の動きに神経をとがらせる背景には、米国産牛肉問題の処理を巡り、就任早々、足元が揺らぐ政権の苦境がある。

(7月4日付朝刊政治面)

「李大統領が」までにかかる句が異常に長い。その上、「李大統領」にたどり着いたと思ったとたん、読者はこれが文全体の主語でさえないことに気づかされる。全文117文字のうち、82文字が「背景には」のひと言に収斂する構造になっている

る。文法上の誤りはないものの、無神経なセンテンスである。さらに、文中の「処理を巡り」は「処理をめぐり」と平仮名書きの方が読みやすい。漢字は「名所を巡る」などの具体的な「巡回」の動作を表す。

上記の文例は基礎演習の格好の教材として、分かりやすい日本語に書き換える練習に使える。次のように2分割するだけでも、ぐっと読み易いセンテンスになる。「…神経をとがらせる。」で切り、「その背景には…」と3分割すれば、一段と明快になる。

李大統領は当選直後、「(歴史問題で日本に)謝罪や反省という話はしたくない」と述べ、4月の日韓首脳会談でも「未来志向」を打ち出していた。それが一転して厳しい姿勢を示し、日本の動きに神経をとがらせる背景には、米国産牛肉問題の処理をめぐり、就任早々、足元が揺らぐ政権の苦境がある。

④意味不明

最後に、意味不明の言い回し例を挙げる。

「仏政府は90年からのルワンダ内戦で、自国民保護による派兵やフツ族中心のルワンダ政府への武器供与などを行っていた。」

(8月7日付朝刊国際面)

「自国民保護による派兵」とはいったい何のことなのだろうか。「自国民保護のための派兵」「自国民保護を目的とした派兵」と言いたいのだろうが、「による」は日本語として乱暴すぎる。

こうした粗悪な文例は、実は枚挙にいとまがない。新聞記事は通常、現場記者→デスク→整理部→校閲部の流れに従って少なくとも三重の関門を通過する。ここで取り上げたテキストに関しては、チェック網からこぼれ落ちてしまったのだ。

日本新聞協会が1990年代から始めたNIE(エヌ・アイ・イー、Newspaper in Education=教育に新聞を)事業は、社会科と国語を中心として教育現場での新聞活用を促進してきている。とり

わけ、文科省の新学習指導要領が「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成のバランス重視」を打ち出し、「意見を記述した文章や活動を報告した文章を書いたり編集したりすること」が強調されたことから、新聞業界にはこれを追い風として歓迎する声がある⁴⁾。若者の活字離れと新聞購読者数の減少を食い止めたいという業界の本音はともかく、子どもたちに教育的模範を示そうとするのであれば、新聞言語の劣化にも今少し目を向けなければならないだろう。

5. 論理・説得力

新学習指導要領は果たして効果を上げるだろうか。指導要領の改訂は、経済協力開発機構(OECD)による各国の15歳の子どもを対象にした「生徒の学習達成度調査」(PISA)で、日本の世界ランクが2000年~03年に急低下したことを受けた形で実施された。PISA調査で指摘された「思考力・判断力・表現力を問う読解力」の課題に対応し、例えば中学校学習指導要領解説は総説で、「観察・実験やレポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動」を挙げる。

だが、新指導要領は当然ながら、これに先立つ教育基本法改正の影響を強く受けており、「伝統と文化の尊重」や「わが国と郷土を愛する」といったイデオロギーから自由になってはいない。学校現場では長年、批判的な教師の排除と反抗しない素直な子どもの育成が目指されてきたことを考え合わせると、子どもたちの思考力・判断力の欠如があるとしても教育技術的な手段だけで改善が図れるのかどうか、悲観的にならざるを得ない。

言葉は論理である。説得の武器である。あらゆる既成観念に対し自由な批判が許容される空間でしか、言葉は豊かにならない。前期演習では、これまで紹介したような文章論的解説を適宜加えながら「代理出産」「死刑存置の是非」「裁判員制度」など時事問題について、各自が意見を述べ合い、小論にまとめ、講師添削を最低二度繰り返す実践を重ねてみた。サンプル数が少ないため効果

を定量的に評価することは難しいが、文章技術面では一定の上達が見られたという印象はある。

「代理出産」と「死刑存置の是非」についての小論から、いくつか抜粋してみる。

◎代理出産について

私は、代理出産に賛成だ。

癌で子宮を摘出したため、子供を産めなくなってしまった向井亜紀さんのように、病気で子供を産めない人がある。でも子供が欲しい。そう願う人がある。その人たちにも子供を持つ権利はあるはずだ。

代理出産の賛否についてのアンケートがある。賛成は約5割、反対は約3割、分からないと答えた人が約3割である。賛成の人の意見は私の意見と同様で、「病気の人でも子供を持つ権利があるから」であった。逆に、反対の人の意見は「親子関係が不自然」「妊娠は自然であるべきだ」だった。(以下略)

数字表記に若干の矛盾があるのはご愛嬌として、この小論の筆者は自分の立場を明快に述べ、その文章も短文の積み重ねで成り立っている。文章のリズムを理解した例といえる。

次に死刑制度に対する賛否両方の小論を挙げる。

◎死刑に反対する

私は死刑制度に反対だ。

どんなに重い罪を犯しても、その犯人を死刑にして殺す権利は誰にもない。日本の憲法にある「個人の尊重」という言葉はどこへ行ってしまったのだろうか。

「被害者の気持ちを考えると、死刑は妥当である。」と考える人も多い。

だがこれに対し、国際アムネスティのホームページでは、「殺してやりたいと思うことと、実際に殺していいかは別の問題です。あなた自身の肉親が殺された時、あなたに犯人を殺せと言うのが友でしょうか、それとも止めてくれるのが友でしょうか。」とあった。

私の考えも全くこの通りだ。

殺された。だから殺し返す。これはただの復讐でしかない。復讐をした被害者は、加害者に変貌するだけだ。

「死刑を廃止したら、殺人が増加する。なぜなら人は、死刑になるのが嫌だから、人を殺さないのである。」という反対意見もある。

だが、去年の12月18日に開かれた国連総会の決議では、死刑が犯罪を抑止する確信がないことと、誤審の場合は取り返しが見つからないことになることが指摘されている。

現在の審理方法上、完全に誤審を避けることはとうてい不可能である。

このように、死刑には問題が沢山ある。死刑が犯罪を抑止していないなら、死刑がある意味はない。現在、世界の半分を超える国で死刑が廃止されている。今や死刑廃止は国際社会の潮流なのだ。

死刑はそれ自体が「人殺し」である。刑罰ではない。日本は最高刑としての死刑を廃止すべきなのだ。(了)

◎死刑に賛成する

私は死刑制度に賛成だ。次の二つの理由がある。

一つ目は、被害者の遺族の気持ちだ。自分の大切な家族を殺されたら犯人を殺したいと思う。それは当然の感情ではないだろうか。死刑が廃止されれば残された遺族の怒り、悲しみのやり場が消えてしまう。被害者の苦しみと同じ苦しみを味わい、重い罪をつぐなうべきだ。

二つ目は、刑務所の設備や予算にかかわる現実的な理由だ。死刑制度に対する反対の中には、死刑を廃止し、終身刑をつくってはどうかという意見もある。しかし、死刑がなくなる分、囚人が増える。受け入れられる囚人の数にも限りが出てくる。刑務所の設備不足、人件費、食事代などあらゆる面で予算がかかる。

死刑反対論をいくつか挙げると、人間が裁く以上誤審は避けられないものであって、死刑になったら取り返しが見つからないという意見。感情だけ考えれば、傷害事件や強姦事件でも被害者は殺してやりたいと思うのではないかという意見。死んで

償うより生きて償う方が苦しいことではないかという意見などがある。確かにこれらの意見にも大いに賛成できる部分がある。

けれど、誤審があり得るのは死刑だけではない。司法制度全体に問題がある。死刑廃止を唱える前に制度自体を見直すべきだ。

傷害事件でも強姦事件でも殺人事件でも、被害者が犯人を憎む気持ちという点では共通しているが、殺人事件は人の命を奪う最も許されない行為だ。そこは他の事件と区別して判断されるべきだ。

生きて償う方が苦しいことかもしれないが、どんな状況であったとしても、生きていられるのは幸せなことだと思う、死刑をもって被害者と同じ痛みを味わうべきだ。

以上の点から死刑制度には賛成だ。(了)

小論文のパターンはいくつかある。典型的な文章は、新聞の社説であろう。社説はまず、社説発表の契機となった問題の背景説明(問題提起)があり、続いて、自社の主張—反対論の紹介—再反論—まとめ、といった流れになる。全体の趣旨を数行でまとめたリードをかぶせる筆法もよく使われる。本演習では、与えられたテーマについてゼミ生がさまざまな論点を調べ、意見を発表。その後小論文を執筆する手順を踏んだ。「問題提起」部分は省略しても、本論の論理展開に主眼を置くよう指導した。ここで紹介した両作品とも、自分と異なる見解を理解した上で、自己の主張を精いっぱい論理的に組み立てようと努力していることが見て取れる。そして、ある程度はそれに成功している。

6. 結語

前期演習の最後に、成長の度合いを測る目的で800字の最終作文を課した。テーマは「大学生活」で制限時間1時間、冒頭の「私の長所」とほぼ同じ条件である。不安と期待が交錯する大学生活を始めて4カ月。アルバイト、友人関係、初めて経験する通学電車内での世相観察…。まだ粗削りではあるが、ゼミ生全員が個性のある文章を書い

た。400字程度で終わってしまう作品が1点もなかったことは、特筆に値しよう。「書き込む」要領が体得されたといえる。

その中から1点挙げる。文意を尽くさない部分も残っているが、1年生でこれだけ書ければまずまずである。

◎大学生生活

高校との大きな違い、その1「校則」。高校は校則が厳しく、染髪・ピアス禁止、スカート丈はひざ下、携帯電話の所持もいけなかった。寄り道もいけないし、電車の中で鞆を床に置いてはいけない。バイトもしてはいけない。男女交際も見つければ朝礼の話題。ここまでくると、どうでもよくなってしまう。

むしろこれが常識と思っていたが、やはり周りの女子高生とは違った。その厳しかった高校生活から一変。大学生活はすべてが自由である。今は私の髪も茶色で、ピアスも3つ開いている。制服はないし、携帯電話も普通に出している。私の中の常識が大学生になって変わったのだ。4月の初めはそれだけで幸せだった。

(中略)

高校との大きな違い、その2「個人」。1限の授業に遅刻をしてしまったある日から、私は自分を甘やかしてしまった。団体行動であった高校と、個人個人で異なる行動をする大学。自由に喜んでいて私が自由に悩むことになってしまった。これには私自身、とても驚きだった。まさか大学で「強制」や「規則」が恋しくなるとは。

(中略)

今はその悩みも前向きに考え、自由なこの大学生活をどう過ごすか、どれくらい頑張れるかワクワクしている。だらだらしては時間があったくない。自由をいかに自分のものにできるか、これからの本番である。(了)

大学で手にした「自由」と裏返しの「不安」、「自由」と隣り合わせにある「服従の心理」と戸惑いが素直に表現されている。この作文の筆者は、「自由からの逃走」という古くて新しい哲学的命題に自ら思い至っている。復活したキリスト

と異端審問官が衆生の幸福をめぐる対決する『カラマゾフの兄弟』中のスリリングな挿話をほうふつさせる。精神的成長と豊かな感性に驚かされる。入学4カ月分だけ大人になっている。

大学生は親元を離れ、生まれて初めて「一人暮らし」を体験するが、身寄りのない老人は「独り暮らし」をしている。同じ「ひとり暮らし」でも意味は違う。使う言葉によって、つくられるイメージはまったく異なってくる。さまざまな言葉使うことによって、微妙なニュアンスが表現できる。国語辞典を手元に置いておくと、いつの間にか語彙は増えている。この言葉の面白さに気付けば、学生たちの文章力は伸びる可能性を秘めている。あとしばらく、試行錯誤を続けてみたい。

注

- 1) 三省堂『新しい国語表記ハンドブック』は文部省編『国語の書き表し方』（昭和25年）に依拠し、読点として「、」を使用する横書き公用文の規則を記載している。だが現在、官報の横組み文には「、」が見られる。本稿が参考にした国立教育政策研究所によるPISA分析『生きるための知識と技能』の横組み文も同様である。新聞記事の用字用語基準である共同通信社『記者ハンドブック』は「、」の不使用を明記。朝日新聞社『用語の手引き』などもこれになっている。
- 2) マス・コミュニケーション論の受講生（2～4年生）を対象に4月に実施した新聞購読・読書などに関するアンケートの結果とも合致している。これもサンプル数は少ないが、回答者92人のうち新聞を毎日読む習慣を身につけた学生は10人。全く読まないとする回答は37人であった。「たまに読む」学生45人も事実上、読まないグループに分けることができよう。読書習慣になると、36人が「ほとんど読まない」と回答。一方、週1冊ないしそれ以上読むグループも21人いた。
- ついでに、一般常識力を試す質問も設けた。日仏米口の首脳の名前、今年の五輪開催都市とG8サミット開催地、09年から始まる市民参加の刑事裁判制度の名称、二大政党による政権の名称一の5問。全問正解者は、新聞を毎日読むグループで10人中4人、全く読まないグループでは37人中の3人だった。当然のことながら、正答率では大差がある。近年の新聞言語の粗雑化にもかかわらず、新聞は一般常識力を養うには最適のテキストではある。
- 3) 敬体と常体の文体史論的解説は、山口沖美『日本語の歴史』（岩波書店、2006）を参照
- 4) 日本新聞協会『新聞研究』2008年6月号は「読解力と新聞」をテーマとしている。赤池幹による巻頭論文『言語力育成』に新聞活用の効果認知」参照

Improving Writing Skills in Primary Semiar

MOTOHIRO MIURA

School of Social Information Studies, Otsuma Women's University

Abstract

In Japanese, the written language differs greatly from the spoken one. While children learn spoken language without any formal training, certain exercises are necessary in order to acquire proper writing skills. It is regrettable that the importance of writing is not emphasized in the Japanese educational system. In our Freshman Primary Seminar class, students frequently use expressions that are too colloquial, making errors in punctuation and sentence structure. These errors occur because students have not received enough training in essay writing throughout their elementary and higher education. This problem can be overcome if students are instructed to write essays on various current topics and are then taught to proofread them over and over again. Utilizing such writing exercises should improve students' writing skills in a relatively short period of time. The following are excerpts from our seminar notes.

Key Words (キーワード)

PISA=OECD Programme For International Students Assessment (生徒の学習到達度調査), NIE=Newspaper in Education (教育に新聞を), The Japan Newspaper Publishers & Editors Association (NSK、日本新聞協会), Newspaper Language (新聞言語), Written Language (書き言葉), Fundamental Law of Education (教育基本法)